

「サステナブル」な 温熱プラント

横浜CC（神奈川県）



ボイラー。排熱でストッカーのチップを乾燥



ストッカー



クラブハウス内の給湯へ

近年、世界のゴルフ界では「Sustainability（サステナビリティ）」が重要なキーワードとなっている。経済・環境・社会の3面から持続可能性を追求する試みだが、日本でいち早く取り組みを始めたのが横浜カントリークラブ（36H）だ。2014年春頃から剪定枝や伐採樹、刈粕などを活用する環境配慮型温熱プラントの検討を開始し、今春完成させている。

プラントは、①破砕機（処理量4800kg/日、電動消音振動型）、②ストッカー（容積10m³未満、ボイラー排熱乾燥システム）、③燃焼ボイラー（熱量16万6000kcal/h、火床面積0.49m²、焼却能力48kg/h）、④パグフィルター（高温用炉布）、⑤貯湯槽（3000ℓ）などからなり、耐用年数は15年となっている。

「本件の取組みは、再生可能エネルギー関連事業として、当クラブの関連会社であるNIKKO OIL PRODUCTS（株）より提案を受けたもので、燃焼効率などゴルフ場独自にカスタマイズしてもらっています。現在は、間伐材や剪定枝をメインに使用しています。環境への配慮も当然ながら、廃棄コストの削減にも繋がっています」

とは、支配人代行兼事業一部長の秋

山朋胤氏。

業界内では、長らく間伐材や刈粕の処理は大きな課題となっている。場内での資源循環の好例として、大いに検討する価値がある。同CCでは、NIKKO OIL PRODUCTS社を通じて情報を発信していくこと。



薪を破砕してチップに